

随筆 司馬遼太郎記念館を訪ねて（“この国のかたち”から）

先日、東大阪の司馬遼太郎記念館を訪れました。以下は、司馬遼太郎の随筆「この国のかたち（1）」の引用です。少し長いですが……。

以下が、夢だったのかどうかは、わからない。ともかくも山を登りつづけていて、不意に浅茅ガ原に出てしまった。こういう場所を昔の修験道は好んだ。まわりを、山なみが花びらのように取りまいているのである。山々には、小袖の裾濃（すそご）のように、青や紫の光が当たっている。ただその浅茅ガ原だけは色が無い。そこに、巨大な青みどろの不定形なモノが横たわっている。その粘液質にぬめったモノだけは、色がある。ただし、ときに褐色になったり、黒い斑点を帯びたり、黒色になったりもする。割れてささくれた爪もそなえている。両眼が金色に光り、口中に牙もある。牙は、折れている。形はたえず変化し、とらえようがない。わずかに息づいているが、言えそうなことは、みずからの力ではもはや人里には出られそうにないということである。君はなにかね、ときいてみると、驚いたことにその異胎は、声を発した。「日本の近代だ」というのである。

ただし、そのモノがみずからを定義したのは、近代といっても、1905年（明治38年）以前のことではなく、その間の40年間のことだと明晰にいうのである。つまりこの異胎は、日露戦争の勝利から太平洋戦争の敗戦の時間が、形になって、山中に捨てられているらしい。「おれを40

年とよんでくれ」と、そのモノはいった。「君は、生きているのか」「おれ自身は死んだと思っている。しかし見る人によっては、生きているというだろう」もっとも人里へ降りていって害をもたらすということはもうあるまいが、ともいった。歴史もまた一個の人格として見られなくもない。日本史はその肉体も精神も、十分に美しい。ただ、途中、なにかの変異がおこって、遺伝学的な連続性をうしなうことがあるとすれば、「おれがそれだ」と、この異胎はいうのである。・・・・

要するに日露戦争の勝利が、日本国と日本人を調子狂いにさせたと思えない。なにしろ、調子狂いはすでに日露戦争の末期、ポーツマスで日露両代表が講和について条件を話し合っていたときからはじまっていた。講和において、ロシアは強気だった。日本に戦争継続の能力が尽きようとしているのを知っていたし、内部に“革命”という最大の敵をかかえているものの、物量の面では戦争を長期化させて日本軍を自滅させることも、不可能ではなかった。弱点は日本側にあったが、代表の小村寿太郎はそれを見せず、ぎりぎりの条件で講和を結んだ。ここに、大群衆が登場する。調子狂いは、ここからはじまった。大群衆の叫びは、平和の値段が安すぎるといふものであった。講和条約を破棄せよ。戦争を継続せよ、と叫んだ。「国民新聞」をのぞく各新聞はこぞってこの気分を煽りたてた。ついに日比谷公園でひらかれた全国大会は、参集するもの3万といわれた。

かれらは暴徒化し、警察署 2、交番 219、教会 13、民家 53 を焼き、一時は無政府状態におちいった。政府はついに戒厳令を布かざるをえなくなったほどであった。私は、この大会と暴動こそ、むこう 40 年の魔の季節への出発点ではなかったかと考えている。この大群衆の実相を明かさなかった政府の秘密主義にも原因はある。また煽るのみで、真実を知ろうとしなかった新聞にも責任はあった。当時の新聞がもし知っていて煽ったとすれば、以後の歴史に対する大きな犯罪だったとっていい。

（“雑貨屋”の帝国主義（この国のかたち 1：司馬遼太郎 p 26））

それより前、私は当時、満州とよばれた中国東北地方にいた。そのころノモンハン事変（昭和 14 年）のことがたえず脳裏にあった。ひとつは私どもの先祖（といってもわずか、4、5 年前の先祖だが）がこの凄惨な戦闘に参加し、こなごなにやられたということもある。それに、私どもの仮想敵はソ連だったし、具体的にはソ連の戦車だった。常住、それを想定して訓練がおこなわれた。私が訓練を受けた四平街の戦車学校の校庭のすみの草むらの中に、破壊されたソ連の BT 戦車が放置されていた。操縦装置その他は日本の戦車にくらべて大量生産むきのごく雑な車体だったが、兵器のいのちである攻撃力（火砲）と防御力（装甲）においてすぐれていた。ノモンハン当時、日本の八九式中戦車や九七式中戦車がこれを射ってもタドン玉を投げつけたほどの効果しかなかったが、むこうの弾はこ

ちらをやすやすとつらぬいた。あの事変では戦車の数も、こちらが一に対しソ連は十の勢力をもっており、結局、戦闘の進行中、関東軍は戦車隊の育成と保全のためという奇妙な論理をたてて、戦場から戦車部隊だけを撤退させた。それが私どもの“先祖”だった。結果として、ノモンハンの草原上の日本軍は死傷70%以上という世界戦史にもまれな敗北を喫して停戦した。この事変は、日本から仕掛けた。しかも日本国家の国家的意志によってやったものではなかったのである。関東軍参謀の独走によって行われたもので、参謀の元締である東京の参謀本部でさえ事後に知らされた。ノモンハン事変は、そのごく1例にすぎない。……

たとえば、ちゃんとした統治能力をもった国なら、泥沼におちいった日中戦争の最中に、ソ連を相手にノモンハン事変をやるはずもないし、しかも事変のわずか2年後に同じ“元亀天正の装備”のままアメリカを相手に太平洋戦争をやるだろうか。信長ならやらないし、信長でなくとも中小企業のオヤジさんでさえ、このような会社運営をやすはずもない。(統帥権の無限性(この国のかたち1:司馬遼太郎p39))

司馬遼太郎記念館は、大阪の近鉄奈良線八戸ノ里駅と河内小阪駅の間くらいにあり、駅から10分くらいのところにある。司馬遼太郎の住んでいた自宅の一角に建てられた建物だ。毎週月曜日が休館日で、開館時間は10時から17時。記念館の玄関口を入れてすぐのところに券売機があり、

順路は庭を横切るように屋外から始まる。最初にみるのは、邸宅の庭に面した彼の書斎だ。ガラス越しにみる彼の書斎で、まず気が付くのは、壁を埋め尽くす本棚の中身のほとんどが辞書や資料であること。彼は仕事にとりかかる時、その作品に関わる資料を書斎に集めた。記念館は展示室とホールからなり、ホールは展示室の先で、ミニシアターになっていて、NHKの編集した司馬の登場するフィルムが定期的に上映されている。展示室の大書架には、司馬の蔵書4万冊のうち、2万冊が高さ11メートルの壁面一杯にびっしりと並べられている。司馬遼太郎は、趣味はあまりなく、昼寝くらいと、言われていますが、精神生活は世界的で、有名な「街道をゆく」では、日本だけではなく、中国やアメリカ、ヨーロッパにも取材をしています。司馬遼太郎の世界に一度、足を踏み入れる事をお薦めします。

(H19年2月 緑井レディースクリニック 林谷誠治)